

---

# ぽてちはコンソメ・右パンチ！

沙月涼音

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ぼてちはコンソメ・右パンチ！

### 【Nコード】

N4775F

### 【作者名】

沙月涼音

### 【あらすじ】

格闘技とポテチが好きな志保。そこへ金髪美少年が現れた。彼は志保に幽霊退治をしてくれと懇願するのだが……。

## 第一話 新車のストーカー？

ふう、やっぱ休日の夜は立ち技最強が最高ね。私はベッドに寄り掛かりながら、小さなテーブルに置いたポータブルDVDプレーヤーで、アンディさまの試合に興じていた。左手には大好物のポテチを持ち、右手で頬張る。

私は一つのポリシーと言うか、こだわりがあった。それは、ポテチは『袋』という事だ。ポテチには袋と容器に入った物が存在しているが、やはり『イモ』本来の姿を残す袋こそが、あるべき姿なのだと確信していた。

「よっしゃあつ！」

アンディの踵落としが炸裂し、相手がマットに沈んだ。何度見ても、この技は芸術だと思っている。そして、何度見てもドキドキしてしまう。結果が分かっているにもそうなるのは、やはりアンディの凄さだっと思った。

視線を画面から逸らし、正面にある壁掛け時計に向けた。時間は深夜二時十二分、そうデジタルは告げていた。電波時計である、狂いはないだろう。草木も眠る丑三つ時？ そんな事は構わず、私は右手を袋に入れた。

「あれ？」

左手を目線まで持ち上げ、袋の中を覗いた。イモの形を成した物はなく、そこには破片と呼ぶに相応しい物しか残っていなかった。

私はそれを数回に分けて口の中に放り込み、次の袋に手を伸ばした。その時だった。

「そんなに食べると太りますよ」

「余計なお世話よ」

はい？ 条件反射的に反応したけど、この部屋って私だけよね？ 気のせい？

「そんな、折角心配してるのに」

やっぱり気のせいじゃない。確かに私じゃない誰かの声が聞こえた。

そう、それは 私の背後。

私は、身体を少し左に捻り、首はもつと限界かって位に捻り、ベツドの方へ向けた。

と、そこには……「！」

「こんばんは、志保さん」

につこりと微笑む『彼』そう、推定十四、五歳の美少年が正座していた。髪は金色、瞳はブラウン。私より綺麗かも……って、何考えてるんだよ、私は。

瞬間、これは現実か？ と思い、一旦向き直り冷静になるよう努めた。が、その美少年はそんな私の意志など尊重せずに、向き直った私の眼前に位置を変えた。

「無視しないで下さいよ」

無視する気は更々無い。どっちかと言えば、夢であって欲しいと思ってる程だ。

少年はテーブルの向こう側で、さっきと同じようにちょこんと正座している。私はジッと目を懲らしてみたが、やはり現実に『彼』が見えていた。

心臓が喉から飛び出しそうって感じは、きつと今だ。

そして、心底驚いた時は、本当に言葉が出ない。悲鳴さえも……。私の口はきつと、フナかコイかって位に、ぱくぱくと口を開閉してるに違いないと思った。

「あおう、志保さん？」

少年は小首を傾げ、私を見つめる。えっと、たぶん彼は幽霊か、またはそれに準ずる何かだ。普通なら、絶叫して助けを求めて、そ

んでもって……えっと、そう、逃げ出すんだろうけど。その風貌がそれを許さない。次第に落ち着き始めてさえる。

何故？ それは、彼が美少年だから。ああ、何て単純な私。ああ、美しさは罪だ。

「あの、志保さん？」

彼が再度私の名を呼んだ。私は咳払いを一つし、

「えっと、アンタ誰？」

「やっと反応してもらえた」

「仕方なくよ。仕方なく」

私の言葉に、少年は少し苦笑いを浮かべた。そこも、可愛い。

「えっと、僕は見ての通り幽霊なんですが」

「そのようね」

「驚かないんですね」

「十二分に驚いたわよ」

人生初体験よ、こんな事。幽霊も美少年も 出来れば、生きてる時に会いたかったわ。

「で、早速なんですが」

ちよつと待て、何だその『早速』という始まり方は、普通自己紹介が先でしょ？ それに何でか知らないけど、私の事は知ってる風だし。そして、私はアンタを知らない……もしかして、ストーカーって奴？ そうか、私ってば、知らないうちに美少年幽霊にストーカーキングされてたんだわ。初めてのストーカーが幽霊って 複雑。

私はその少年を指さし言った。

「だから、アンタ誰よ」

一瞬、きょとんとした少年は、次に「ああ」という瞳の輝きを放ち、全てを理解した感じで、

「僕はぴゅう太（仮）と言います」

「何よその、八十年代に登場した日本語でベーシックが書けるといっ、珍ピューターみたいな名前は」

「おや、お若いのによくご存知で」

そう言うアンタも十分若く見えるけど、それとも見かけは十代でホントはおっさんとか？ いやあゝっ、それだけは許して。私の夢を壊さないで。

「変な名ね。それに何よその（仮）って」

「え？ その、本名は明かせない規則になってまして」

ぴゅう太は金髪を右手で触りながら、申し訳なさそうに笑った。幽霊でも可愛い。

「で、何しに出てきたわけ？」

「そうそう、それなんですが」

正座を崩す事無く、ぴゅう太の目が真剣モードに切り替わった。ああ、こんな瞳に見詰められて告白されたら、即、OKって親指立てちゃうんだけどなあ。

「実は志保さんをお願いと言つか、協力をして欲しくて」

「お願い？」

「そう、僕の為に幽霊退治をしてくれませんか？」

「はあ？」

確かに私は格闘技が大好きだし、身体も鍛えてる。そんなんだから、未だに恋人も出来ない。って、そんなのほつといてよ。で、今では敬愛するアンディの踵落としも習得した。靈感もそれなりにあるし、まあ、だから彼も見えてる訳なんで。

でも、そんな私に幽霊退治ですって？ ああ、ずえゝつたい無理。

「あ、退治と言っても正確には浄化というか浄霊なんですが」

「無理」

「え？」

「残念だけど、他あたって」

これは苦渋の決断と言ってもいいわ。美少年と幽霊退治。幽霊だけならまだ許せたんだけど。

「そんなあ、志保さんにしか出来ないんですよ」

ぴゅう太は、フツと中空に浮くと、テーブルを素通りして私の目前で止まり、両手を合わせて懇願する。

お願い、そんな目で私を見ないで。決意が乱れるわ。

「何も私じゃなくても、出来る人沢山いるでしょ？」

「そりゃ靈力の強い人はそれなりにいるのですが……」

「じゃあ、そっちでもいいじゃない」

「でも、必要なのは靈力だけじゃないんですよ」

「はい？」

「相手を倒す力も必要なんです」

「力って、まさか物理的な……」

「御名答、流石、志保さん冴えてますね」

左の人差し指を立て、また笑うぴゅう太。

えっと、その話を総合すると。私が彼に協力して、身体を張って、持つてる靈力を使い、幽霊退治をする　と。

「やっぱ、無理」

「えっ」

「大体、そんな事出来るわけじゃないじゃない」

「出来ますよ」

「出来ない」

「大丈夫ですって」

「絶対に無理」

「じゃあ試しにやってみます？」

「はい？」

試しにやるって？　何を？　幽霊退治を？　幾ら私好みの美少年だからって、度が過ぎるわよ。

そんな事を考えてる私を余所に、ぴゅう太はテーブルの上に移動した。やはり正座はそのままに、一見外人に見えてしまう彼が正座してる姿は、少し違和感がある。ま、幽霊だからテーブルは壊れないからいいけど。そして、ぴゅう太は自分の膝の上で両手をかざし始めた。すると、その手はボワツとした白い光に包まれ、何かの形を成してきた。

猫だ。それもちよっと小さい。子猫？

ぴゅう太がその子猫の頭を、愛おしそうに撫でると目を伏せた。

「可愛いわね」

「この子は、先月交通事故で轢かれてしまって……」

「あ、ごめん」

「いいえ、いいんです。それより、志保さんの力で、この子を空に帰してもらえませんか？」

「え？」

「言っただじゃないですか。貴女にはその力があるって」

ニッコリ微笑むぴゅう太。可愛い……じゃなくて。空に帰す？

私が？ あはは、ご冗談を、と思いながら彼を見る。

子猫を抱いたまま、ジッと私を見ていた。

取り敢えず笑っとく？

「あははは」

つづく



## 第二話 子猫と握り拳！

愛想笑いを浮かべてはみたが、一人と一匹はくすりとも笑わない。そりゃそうか……なんて思ってみても後の祭り、いやあその視線が痛いわ。お願いだからそんな目で私を見ないでよあ。

ああ、そんなに見詰められると……見詰められると、胸がキュンキュンしちゃう。え？

「か、可愛いわねえ、この子」

私はぴゅう太の膝で身体を丸める子猫を抱き上げようと、手を伸ばした。

そもそも、触れるかどうかなんてその場では分からなかったけど、自分の気持ちを悟られない事が目的。

「あ、志保さん。お止めになった方がいいかと……」

ぴゅう太が言うのも聞かず、子猫を抱き上げた私。

「にゃあ」ひと鳴きして、私に飴玉の様な瞳を向ける。きゃあ、可愛い過ぎるう。

前足の脇を両手で包むように、優しく掴み。目前まで持ち上げる。当然、後ろ足はダランと下に伸びるわけ。そう、お腹は無防備って感じ？

sonでもって、必然的に視線は上から下にいく……「ひっ!!」言葉が出ないというのは、こう言う事なのねえと身をもって学んだ瞬間だった。

「だから言ったのに……」ぴゅう太は、私から視線を外し下を向いた。

私はと言えば、まだ硬直状態が続いていた。出来る事なら、抱き上げる前に再起動出来たらどんなに良い事だろう。そう、思わずにはいられない。

で、何が見えたですって？ いいのかあ、これってホラーじゃないよね？ 取り敢えず、掻い摘んで話すわ。

ぴゅう太は、この子猫は事故で死んだと言っていた。上っ面が大丈夫って事は？ もう分かったよね？ 子猫の腹部が……。

私は一つ深呼吸をすると。まぶたをゆっくり閉じた。そして……。「きやあああああつー！」

これでもかかって位の悲鳴が出た。そして、抱いていた子猫を中空に投げ、立ち上がった。可愛いのにって？ そんな事言える人は、現場を知らないからよ。

そして、右手に力を込めて、子猫をパンチ！ 正確にはまだやってないから、パンチ体勢と言っべきね。動物虐待？ はいはい、これが生きてたのならね。第一死んでるんだもの、大丈夫でしょ？ ほんの数秒、その場がスローモーションの様に時が流れた。ミルクの王冠とか見たことあるけど、あれって不思議な感じがするのよねえ。

でもって、私の腕を離れた子猫は、天井スレスレからゆっくりと降下を始めていた。

私は少し身体を低くし、右拳に力を込めた。

「いつ……やあああああつー！ 嫌過ぎるううー！」

叫びながら、握った拳を斜め上四十五度方向に向け放った。

「にやあ？」

子猫が嬉しそうに笑った。いえ、そう感じたの……笑ったって。

右手が子猫の身体を捉えた。特に感触は無かった。重いとか、痛いとか、そんな風な感じは全然無かった。ただ、その子に触れた瞬間、光が出た。青白いというか……そんな感じの光が出たの。

そして、子猫は消えた。そう、何事もなかったかのように……跡形も無く。

暫し呆然として、私は立ち尽くした。右手も何か力が入らない。痺れてるって感覚が襲っていた。

「ね、出来るって言ったでしょ？」

ぴゅう太が静かな声で言った。正座は崩さず、微笑みながら。首と視線を彼に向け、私はその場にへたり込んでしまった。

これって。

テーブルを挟んで、私とぴゅう太は向かい合わせに座っていた。

「理解して頂けましたか？」

「えっと……これは夢よね」

「まだ、そんな事を……」

だつてさあ、幽霊退治なんてさあ。昔の映画じゃあるまいし、掃除機とかでパパーッって訳にはいかないでしょ？ 呪われたらどうする訳？ それこそミイラ取りが何とやらじゃないのさ。

「ねえ、一つ聞いていい？」

「何でしょう」

「その、幽霊退治は……その、あなたも一緒にやるのよね？」

「んゝ時と場合によるでしょうか」

「はい？」

何よれ！ それじゃ下手したら私一人でやんなきゃならない事もあるって事？ んゝ。

「やっぱ無理」

私は開けたばかりの薄塩ポテチを摘むと、お茶を手にした。やっぱ茶請けにはポテチよねえ。はあ、和むわあ。

「えっと、寛がないで頂けますか？」

「いいじゃない、私の部屋なんだから」

「いいですか志保さん」

「な、何よ」

急にぴゅう太が私の目前に迫ってきた。綺麗な顔が数センチの所にある。キス出来ちゃうくらいに……。

「志保さんは出来るんです。僕はあなたの助けが必要なんですよ」

「そうは言っても……やっぱ怖いものは怖いよ」

「僕が守ります」

「え？」

真剣な眼差しで私を見つめる彼。マジで？ 私を守ってくれるの？ ああ、年下とは言えこの力強い瞳。やっぱり生きてた時に逢いたかったわ。

「だから、お願いします」

「まあ、そこまで言われちゃ……私も無下には出来ないけど」

「やばっ、下心みえみえ？ うっん、そんな事ないわ。これは人助けよ、人助け。私はそう自分に言い聞かせた。でも、顔は赤くなってるんだろっなあ。」

「本当ですか？」

「取り敢えず、話は聞いてあげるって事よ」

「え？」

「だってさ、ドラゴン退治とかやらされたら困るでしょ？」

「それは……無いと思いますよ」

「そうなの？」

「ええ……」

その後、ぴゅう太から衝撃的な内容を聞かされる事になるのだ。

つづく

### 第三話 週間・死者名鑑ベスト一

ドラゴン退治はしなくても良い訳ね。それは助かるわ……って言うてもまだ引き受けるかどうかは保留よ。まあ、彼と一緒にいれるならって思うと、気持ちは揺らいではいるけど。

で、私達は改めて向き直った。ぴゅう太はコホンと咳払いを小さく一つした。少しワザとらしい感じはしたけどね。

「それじゃ、これから本題に入りますね」

「ええ、いいわ」

「まずは、これを見てください」

と言つて彼は私の目の前に、一冊の本をテーブルに置いた。大きさは……そうねえ、四用紙位かな。よく分からない模様の表紙に、漢字でこう書かれていた。『週間・死者名鑑ベスト一』と。

「えっと、何ですかコレ？」少し引き気味の私に、ぴゅう太は。

「見ての通りですが」とにつこり笑う。

ああ、可愛い。じゃなくて、死者名鑑で何！つか、これって週刊？ 週刊誌なわけ！？ ありえない！い！あの世も変わったわねえ。

「そうじゃなくてっ」私は引いた身体を前に戻し、その本をペシペシ左手で叩いた。

「この本が何かって事ですか？」

「そう、その本とあなたの願いと何か関係あるわけ？」

「それが大ありでして……えへへ」

えへへって、あゝた。その照れ笑いは反則よ。抱き締めてもいいですか？

「どうしたんですか？」

「へ？ と、取り敢えず、話の続きを聞かせて」

慌てて話を元に戻す。ぴゅう太は「それじゃ、最初から」と言つて姿勢を正した。

「僕が閻魔大王に課せられた……」

「ちょ、ちよつと待つて」

「何でしょう？」小首を傾げるぴゅう太。

「閻魔さまって実在の人物なわけ？」

「そうですね、何か？」

何か？ じゃないわよ。そりゃ私だって、閻魔さまの名前くらいは知ってるわ。地獄の最高責任者で、嘔吐きな輩の舌を抜いて……それからあ、罪人を地獄の各部署へと放り込む。誰も逆らえない絶対者。それが本当にいるなんて……会ってみたい。

「あ、う、続けていいでしょうか？」

「あ、ごめん。続けて続けて」

「課せられたポイントは一五ポイント。これは、僕が地獄に墮ちないで済む最低のポイントです」

「ポイント？」

「そうですね。今の地獄では、最後のチャンスと言いますか……そんな制度が施行されたのです」

「それがポイントってわけね」

「そうですね。これは、現世で彷徨い歩く、成仏しきれない霊を浄霊又は除霊する事で貯まってゆきます」

「まさかとは思うけど、ポイントカードとかあるわけ？」

「まあ、似たようなものは」

「あんの！？」

「ええ、これですけど」言って取り出したのは、一枚のカード。それには『地獄の脱線しては駄目だよカード』と書かれていた。地獄って案外ポップなノリなのね。

「はあ……まあいいわ。それで？ 私に協力して欲しいと？」

「はい」

「で、それは良いとして」

とは言ったものの、それもこれも良いわけじゃないわよ。まずはポイント制の地獄はさておきって事だかね。

「この本は何なわけ？」私は置かれたけつたいな本を指差した。だいたい何なの？ このふざけた名前の本は、あの世の人が泣いてるわよったく。

「そう、良い所に気がつきましたねえ志保さん」

「そ、そうかなあ」って、何で私が照れ笑い？

「で、このポイントを得る為の目安になるのが、この本なのです。

この本には、原則先週中に亡くなった方の名前や住所、職業、年齢。所謂、個人情報に記載されています」

「そ、そうなの？」地獄じゃあ個人情報保護っていうのは無いわけね。

「そして、それは難易度によってランク分けされ、それぞれにポイントが割り振られています」

「もしかして」

「そうです。上位程難易度が高く、そして高ポイントを得られるってわけです」

極めて爽やかに笑い、そして自慢げな彼。もう、私が協力する事が前提？

「じゃあさ、地道に小さいポイントを貯めていけばいいんじゃないの？ それなら私の助けもいらないし、何より楽だと思っけど。そりゃ、数はこなさないとならないけどさ」

取り敢えず、何としても阻止！ 我ながら建設的かつ合理的な意見が出たわ、うん。

「それもやり方としてはアリです。でも、それだと時間がかかり過ぎるんですよ」

「いいじゃない、ゆっくりやれば」

「実はそうもいなくて」

「どうしてさ」

「二週間の期限付きなもので……はははは」

「な、何よそれ」流石地獄、そんなに甘くは無かったかあ。やるな閻魔ちゃん。

「それで、やってくれますよね？」

「はい？」

「幽霊退治」

綺麗な金髪が揺れ、ぴゅう太が微笑む。はあ、もう負けそう……ううん、まだまだ怖いのは御免だし、もちよつと詳しく聞いてからにしよう。

「ま、まあ慌てないでさ。その本を見せてよ」

「良いですよ。ささ、遠慮なせずに」ぴゅう太がその本を押し出す。

「そ、そう？」

私は恐る恐る『死者名鑑』なる週刊誌を開いた。

トップページは特集記事で『華麗な死に様』と題して、人生を謳歌した人物の事が四ページに渡って書かれていた。流石、四ページつてのにこだわっているわ。

その次が肝のランキングページ。ベストー　　と言うだけあって、ずら～つと名前が並んでいた。ぴゅう太が言った通り、一人一人にポイントが割り振ってあった。ただ、私が思っていたのとちよつと違って、個人のポイントがバラバラだった。当然、一位の人が――　点だと思っていたのに、そうじゃないんだ。

「ねえ、このランキングって誰がどうやって決めてるの？」

「えつと……確か、専門の機関があつて。日々亡くなる方の死に様を参考に決められてるとかどうとか」

「死に様？」

「そうです。全国で多くの方が亡くなるのに、全ては網羅出来ないでしょ？」

「そ、そうね」言われてみればそうだね。死者全員なんて入れたら、とんでもない数になっちゃうでしょうし。にしても死に様が参考だなんて、一位の人は一体どんな死に様だったのかしら。

私は興味が沸き、その気になる一位の人物の欄に視線を向けた。  
が……。



「ちょ、ちよつとお」

「どうかしましたか？」

「どうかじゃなくて。ベストテンの人達って、死に様詳細無いわけ？ 他はあんのに」

「え？ ああ、それは見つけてからのお楽しみって事になってます」  
彼はひょいっとそのページを覗き込み、笑いながら言った。

お楽しみって、宝くじかってえの。

「でもさあ、そもそも現世に留まってるって事は相当この世に未練があるわけでしょ？」

私は開いたページもそのままに、腕を頭に組んで天井を仰いだ。

「ええ」ぴゅう太は変わらず冷静な返事。

「て、事わよ。皆それぞれ執着心があるって訳じゃん」  
「ですね」

「呪われたりしないわけ？」

天井から視線と共に顔と身体をぴゅう太に向けた。

「さあ……」肩をすくめ、彼が答える。

私の背中に悪寒が走った。

「やっぱ無理」

「大丈夫ですって」

堂々巡りの末に、丸め込まれそんな微笑がそこにはあった。

つづく

#### 第四話 私の右手が真っ赤に燃える！

夜中の街は車通りも少なく、何かちよつと怖い。ましてや、私みたいな美少女なんて下手すりや変態に襲われかねないわ。

何て事を言ったら。ぴゅう太は「大丈夫です」ですって……。それは何？ 私なら襲われないって事？ それとも、守ってくれるって事かしら？ と、続けた。「いえ、志保さん強いですから」……。私を守るって話は何処いった！

何だかんだで、結局手伝う事になった私。そんなもって、早速出ようと誘われた。深夜に美少年とデート……。まあ、それも良かったんだけど、時間も時間だったから明日にしてとお願いした。第一、徹夜はお肌に悪いもの。

で、翌日深夜未明。手伝うと決めた以上、キツチリ決める。私達は、街からちよつと離れた国道沿いに立っていた。今はランキング七九位の男性を探している。何故この人が選ばれたかと言えば、あのランキング本。私は、出来るなら下位の奴から順番につて言ったんだけど。下位の死人で浄化しやすいから人気があるんですって。

まったく、考える事は皆一緒よねえ。

ん？ どうしてまだ浄化されてない人が分かるのかって？ そうよねえ、私も最初は不思議に思っただけだ。どうやらこのけったいな本、オンライン機能がついてるらしくて……。もう、これだけでも画期的なだけださ。だって本よ、本。普通の本なんてこんな機能あるわけないじゃない。でね、浄化されたと同時に、該当する人物の欄が黒く反転する仕組みになってるんだって。あの世の方がIT文明発達中って感じ？

目の前にある国道は、片側二車線で中央分離帯がある。探している男性は、その分離帯に衝突して死亡した。と、そう記載されていた。私は本を片手に、そのページを開いて辺りを見回していた。

「ねえ、ぴゅう太」私は左隣に立っていた彼に言葉をかけた。

「何でしょう？」

「この人って、事故死なんだよね？」

「え？ 違いますよ」

「うそ!？」

「ちゃんと本に書いてありますよ」

「何処にさ」

「死に様欄です」

相変わらずの微笑みでぴゅう太は言葉を返す。私は改めてランキング欄を見返した。確かに、個人情報欄の横に彼が言う死に様欄があった。それにしても、この本でやっぱ『とんでもない』本だね。

取り敢えず、その欄に視線を落とす。『自殺』……そこにはそう記載されていた。

「自殺？」

「ええ」

「自殺ねえ……」

中央分離帯にぶつかって自殺だなんて、よっぽどの事があったんだろつか。私達は並んで郊外に向かって歩いた。傍から見れば私一人だけが歩いているように見えるんだろうなあ。なんて思いながら手に持った本には、肝心の場所が記載されていない。全てにおいて付近とだけ書かれているだけだった。つたく、ここが一番の肝じゃんか。ケチくさいわねえ。私はこの疑問をぴゅう太にぶつけた。

「ねえぴゅう太？」

「今度は何ですか？」

「何で詳しく載ってないの？ 死んだ場所」

「え？ ああ、それは宝探しの要素を盛り込んだって聞きましたよ」

「またいらんことを……」私は呆れるのと同時に溜息をついた。程なくして、中央分離帯のセンターポールがくの字に折れている場所を見つけた。路面には引きずった跡に、分離帯の中にあっただろう土がこぼれていた。

間違いない、事故の跡だ。

「ねえ、あそこじゃない？」右斜め前方を指差す私。

「え？ ええ、案外当たってるかもしれないね。行ってみましょう」

パツと明るい表情になったぴゅう太は、スツと浮くと鳥のように飛んで行ってしまった。

「ちょ、ちよつと」私にはそんな芸当出来ないわよ。

長さにして十数メートルだろうが、分離帯の中にはYの字になった銀色の鉄柱が二本、それぞれ果物がぶら下がるようにオレンジ色のランプが取り付けられていた。

私達は中央分離帯の傍で事故の痕跡を詳しく調べた。道路のえぐれ具合やポールの折れ方。そして、彼の有無。きつと間違いない、予想は確信へと変わっていった。

私は折れたポールの傍で意識を集中させた。

すると。

「志保さん。あれ」ぴゅう太が静かに言った。

私は閉じた目を開き、視線を五メートル程先の街灯へと向ける。何か黒いものが見えた。そしてそれは、次第に形になっていった人だ。

「どうやら、彼のような」

「そのようですね」

その影は形を成し、一人の小柄な男性の姿になった。顔は細面、痩せ型、髪の毛は短く少し薄い。何より特徴的なのは、チヨビ髭を鼻の下に生やしていた。

スケベそう……。

これが私の第一印象だった。

と、同時に思った。

こいつなら勝てそう。

「ねえ、あの人がそうなの？」

「だと思えます」

「まあ、取り敢えず挨拶でもしてみる？」

「問答無用でやっちゃってもいいですけど」

さらっと言うぴゅう太に、私は一瞬戸惑った。そりやそうでしょう、いきなりつてのはさあ。いくら相手が幽霊でも失礼なんじゃないかなって。でも、ぴゅう太が言うには「現時点の彼等には理性はありません。言わば身体を持たないゾンビなようなもの」だから、話し合いみたいな平和的解決はほぼ不可能なんですって。下手に挨拶して気付かれたら、それこそこっちがピンチに陥って面倒な事になりかねないそうだ。

そう言う事だから、私達は静かにゆっくりと目標へと近づいていた。それも後ろから回り込むようにね。卑怯？ いえいえ、奇襲も立派な戦略！

目標を二メートルに確認。ここからなら一気に畳み掛けられる距離だわ。幸いにして『彼』はまだ気が付いていない様子だった。立っていた『彼』はコンクリートブロックの上に座って俯いていた。そこだけ切り取って見ると、とくても寂しそうなオッサンなんだけどなあ。

それを私らは除霊していくのよねえ。しかもぶん殴って……何とも複雑だわ。

「志保さん。準備はいいですか？」ぴゅう太が小声で言う。

「ええ」私はぴゅう太に貰った黒いグローブを右手にはめ領いた。

因みにこのグローブ。指の部分は無くって、しかも片方しかない。何でも私の霊力を増幅してくれる機能があるそうだ。

まあドーピングみたいなもんかな。

私は右手に力を込めた。三……二……一！

「Goっ！」一気に距離を詰め右手を引き霊力を溜める。目標も私に気が付くが、もう遅い。

拳に込めた霊力をぶつける為、今度は前方に突き出す。おっしや、仕留めた！

と、思ったのも一瞬。『彼』がくるりと身を翻した。鮮やかすぎるくらいに、あっさりと攻撃を交わす。私はその横をするりと通り抜けた。当たるものだと思って繰り出した攻撃だもんだから、バランスも崩した。両手を着き、四つんばいの形になった。

「志保さんっ！」ぴゅう太の叫び声が聞こえた。

振り返ると『彼』が両腕を振り上げ私に襲い掛かろうと準備中。

ま、まずい！ 私は右足で路面を蹴り、その勢いで進みながら立ち上がり逃げた。

冗談じゃないわよお。

ドゴーンッ！！

轟音と同時にコンクリート片が背中当たる。『彼』が腕を路面に振り下ろしたのだ。

「げっ」逃げながら振り返ると、道路の一車線に大穴が開いていた。ごめ〜ん、弱そうだって言ったの、撤回するわ。だから、大人しく殴られてよお。

「ぐおおおおおっ！！」叫ぶ『彼』

あは、やっぱ駄目？ だよねえ……。

このっ、暴走モードを何とかしなきゃ。私は五〜六メートル程距離を取ると、奴に向き直る。

「志保さんっ！」ぴゅう太が街灯の上で叫ぶ。あんた、何処にいのよ。

ふっと、一息吐き……私は奴を威嚇しながら作戦を練った。

u u u

## 第五話 あの手を叩き込め！

兎に角、暴れまくるちよび髭を何とかしなきゃ。

私はグローブを左手で整えた。

「よしっ」短く気合を入れ、ダッシュした。

ちよび髭との距離が一気に縮まる。

奴の腕が届かない所で、私は体勢を低くし懐に潜り込んだ。彼の右腕が頭上に降りかかる。私は同じ右手で受け流し、左でボディに拳を叩き込んだ。

「グホッ」短く唸る。

効いたか？

が、しかし。彼はくるりと身体を回すと、受け流した右手でバツクブローを仕掛けてきた。

腕が鞭のようにしなり、私目掛けて飛んできた。

「ひっ！！」

私はかがんでそれを交わす。

つたく、危ないじゃないのよ。

にしても、顔に似合わず素早いわね。長引かせるのは危険だね。

私は一旦後ろに跳ねると、右拳に力を溜めた。

「？」

あれ？ 力が入らない。

まさか……とは思っけど。

「志保さんっ！ 危ない！」ぴゅう太の声が響いた。

「え？」

気付いた時には遅かった。ちよび髭のパンチが左胸をヒットした。

「くっ」息が一瞬詰まる。

数メートル飛ばされ、私は尻餅をついた。

「胸が小さくなったらどうすんのよっ！」

悪態を吐きながら胸を押さえる。



おかしいなあ、絶対に届かない距離なのに。だが、その疑問はすぐに解ける。

ちよび髭の腕がダランと地面に伸びていたのだ。

ちよつとお、それって反則じゃない？ 腕が伸びるなんて、怪しげな坊主が能力者くらいしか知らないわよ私。

と、考えてる間に、今度は左足が伸びてきた。

「ひっ」

何なのよあれえ。地面を転がって逃れたが、ここは車道よ、轢かれたら洒落にならないわ！

「ったくもう。何でもアリなわけ？」

立ち上がり再び右手に集中したが、やはり力が戻っていない。正確には霊力だが。

「ぴゅう太！」私は叫んだ。

「何でしょう」冷静な声が背後から聞こえた。

「素早いわね」

「僕も幽霊ですから」

「まあいいわ。ちよつと頼まれてくれる？」

「何でしょう」

「ぼてちを買ってきて」

「はい？」

「だから、ぼてちよ」

「言ってる意味が分かりませんが」

「ったく、顔は良いのににぶちんねえ。」

私は振り返り、ぴゅう太に向き直った。敵に背を向ける危険性もあつたが、今はこっちの方が重要だったからだ。

「ポテチよ。ジャガイモのお菓子」

「ええ、それは分かります。でも、何故今なのでしょう？」

「力が出ないのよ」

「はい？」又も怪訝そうな顔のぴゅう太。

「だから、ぼてちが無いと霊力が出ないのっ」

言って、少しの間。

そして。

「えええええっ!!」反応遅っ。

「兎に角頼んだわよ。ハイこれ財布」

私はポケットの中の財布を彼に渡した。小銭入れで小さい黒いやつだ。

「買うと言っても、ここには店なんてありませんよ」

「ちよつと戻ればコンビニくらいあるでしょ」

「で、でも……」

「ずべこべ言わずさっさと行く」

「は、はい」

ぴゅう太はフワリと浮くと、元来た道に戻って行った。

「ふっ」私はまた短く息を吐いた。

さあて、ぴゅう太が戻ってくる間、何とかしないとね。

向き直りちよび髭の姿を捉える。相変わらず暴れまくっていた。

道路の片側は道路工事の如く掘られ、無惨に地面を晒していた。

私もドジを踏んだものだ。まさかここで力が出ないなんて。こんな事なら一袋全部食べとくんだったわ。

「ぐおおおおっ!」

ちよび髭がまた雄叫びを上げた。地鳴りのような低く耳障りな声。

「ったくもう」

私は奴に向かってダッシュする。霊力が出ないだけで、リアルパワーはまだあったしね。少しでも被害を食い止めなきゃ。

何故って？ 被害が大きいと大減点なんだって。ただでさえ順位の低い幽霊なのに、ここに来て減点は更なる苦勞を重ねなきゃならないわ。

そんなの、ごめんって感じだもの。

今度は正面からではなく、後方からの攻撃に切り替えた。

まずは、正攻法のように見せかけ正面から突っ込み、直前で左側へ

ステップ。バスケットやサッカーで言うフェイント？　みたいなもんね。横をかすめると同時に、彼の後ろ首元へ手刀をお見舞いする。首から上が前方へと出され、彼は苦悶の表情を浮かべた。

やりに、手応えアリって感じ！

続けて振り返りざまに、彼の右足目掛け蹴りを食らわす。丁度膝裏の辺りだ。

ちよび髭は体勢を崩し、地面にひざまづいた。

「よしっ」

私はすぐさま正面に回り二メートル程距離を取って、一気に加速。相手の片膝に飛び乗り、こめかみ付近へ膝蹴りを叩き込んだ。ちよび髭は地面に倒れた。

「ふっ、シャイニングウィザード。久々に決まったわ」

私は足元の彼に視線を落とした。流石にすぐには立ち上げっては来ないだろう。だって渾身の一撃だったもの。

と、思ったのも束の間。

ギロリと彼の瞳が私の方へ向けられた。

ぞぞぞっっっ。背筋に悪寒が走る。

ま、まじですか？　普通ならあれでスリーカウントなのよ。危険を感じ、その場から離れようとした瞬間。左足首を掴まれた。しまったあ！

奴は痛い位に掴むと、事もあるうに私を放り投げようとする。

ちよ、ちよっとタンマ！　倒れたまんな私を投げる気？

グイッと引き寄せられたかと思うと、ムチ打ちになるんじゃないかって程の力で逆方向へ。

ああ、今私は鳥になったわ……。

「きゃああああっ！！」などと乙女チックな悲鳴をあげてみた。

空が上、地面が下、そしてそれが逆になる。私ってば回ってる？と、背中に強い衝撃が走った。

気が遠くなる程の衝撃だ。受身失敗の背負い投げみたいなの？　兎に角苦しい。

あのちょび髭強すぎよ。星が綺麗だわ。

と感じてる目前に、ぴゅう太の顔が登場！

あまりに近くだから、思わず首に手を回してキスを……なんて。

「大丈夫ですか？」

「え？ あ、あんまり」

「買ってきましたよ」

「おっ」私は上半身を起こした。

「ハイ、これでいいですか？」

ぴゅう太が手渡したのは、うす塩味だった。しまったあ、味指定すんの忘れたあ。しかもビッグだし。

「どうしたんですか？」

「な、何でもないわ。ありがとう」

「いえ、お役に立てて何よりです」

言って私はポテチを受け取り、封を切った。食欲をそそる芋と油のコラボ。

んゝいい感じ。

私はポテチを口に放り込み、無心で食べた。霊力が漲ってくる。

「よおし、いいわ。これよこれ！ いい感じ」

「やれそうですか？」

「ええ、次で決めるわ」

「頑張ってください」

「でも、次でダメなら。私降りるから」

「えええええっ！」

つづく

## 第六話 あの世界のネット社会

呼吸を整え、力を右手に集中させる。

「行けそうですか？」ぴゅう太が不安げな言葉をあげた。

ここで「行けそうな気がする」とか言った方が良かったのかもしれないけど、却下。

手のひらにソフトボールだいの大きさの靈力が形成された。

「よし」準備は万端。後はちよび髭の隙が出来るのを待つばかり。

長い腕を無茶苦茶に振り回すちよび髭。電柱のコンクリートが剥がれ、中の鉄筋がむき出しになっていた。

「ねえぴゅう太」

「はい？」

「損害つて自腹？」

「えっと、一応保険には入ってますが……下手打つと何割かは負担になるかも」

「なんですって！」

何て事なの、ここで停電なんて事になったら洒落になんないわ。

私は暴れるちよび髭に向かって叫ぶ。

「ちよつと五郎！ それ以上壊さないでよ！」

「あのう、志保さん？」

「何よぴゅう太」

「誰ですか？ 五郎って」

「奴に決まってるでしょ。小毛里五郎」

「またそんな危ない名前を勝手に付けて……怒られますよ」

「兎に角、危機感出てきたわ」

「それは、何より」

五郎の両腕がしなり空を切る。道路標識が真ん中からぐにゃりと折れた。

「ああ！」と叫びつつも、五郎の隙を私は逃さなかった。「今だ」

霊気はそのままに私は飛び込んだ。五郎の左腕が私に向かって振り下ろされる。

「遅いつ！」私は左に避け、更に深く懐へ。

「必殺つ、エクストレイ〜ルっ！」右手の霊力の玉を、五郎のみぞおちへ叩き込んだ。

五郎はくの字に身体を折ったかと思うと、バネが伸びたかの如く後ろへ仰け反りこれ以上にならない位の咆吼を上げた。

「やったか」私は三步下がり五郎を見た。青白い光が五郎を包み、無数の蛍が飛び交っているのではないかと思わせる位の光が夜空へ上がってゆく。

「やりましたね、志保さん」

ぴゅう太が私の後ろで言った。こいつ、いつの間に……。

「はあ、めっちゃ疲れたあ」

私はベッドの上に身体を投げ出した。

「お疲れ様です。志保さん」

「なっ」眼前に美少年の顔があ。私は慌てて身体を起こした。その動きに合わせてぴゅう太も動く。

「次もお願いしますね」美少年が微笑む。かぁいいねえ……って触れないのはネックだわ。

「で、今日ので何ポイント位なの？」

「下位ですからねえ。さほど多くはないかと思えますよ。知りたいですか？」

「そりゃ、まあ……でも」

「えっと……」ぴゅう太が手帳を取り出しページをめくった。

「あ、やっぱいい。今日はもう寝るわ」

「え？」

知リたかつたけど、疲れと眠気が限界。それに明日知ってもポイントが増えてる訳じゃないし。私、学生だしね。

「じゃ、おやすみ」

「はい？」

呆氣に取られたぴゅう太の顔がぼんやりと見えたが、私は深い海へ沈むような感覚で眠りに落ちていった。

目覚ましの電子音が頭上で鳴り響いていた。目蓋がおもたひ……てか、身体全部が重たい。ベルの音を止める気力も湧いてこなかった。だが、容赦なく電子音は鳴り続けた。しかも段階を追うことにその音量を上げてゆく。迷惑な話だ。

「ん〜んっ！」私は暫く聞き続けたが、最大音量の一手手前で耳の限界点に到達。仰向けになったまま、目覚まし時計を右手で叩いた。「痛っ」手の甲がスイッチに当たった。そりゃそうだ、体勢は背泳ぎだったんだから。目覚ましも相まって、その刺激で更に目が覚めた。

「おはようございます。志保さん」

「おはよう」と、反射的に答えてしまったが……ちよつと待て。

私は身体を起こし、声の主を捜した。

「あゝ！」そこに居たのはぴゅう太だった。「あんた何故ここに？」その問いに彼はにこやかに微笑むと言った。

「まだ終わってませんから」

いや私が聞きたかったのはそうじゃなくて。

「何で朝なのに居る訳？」

「はい？」

「だって、そうじゃない。幽霊と言えば夜。これは定説よね？」

「はあ」

「なのに、何故にあんたはそこに居る！」

「禁則事項です」

「それに……どうして私の机にあんたの私物がっ」

私はベッドから出るなり机を指差し言った。そりゃごくたまあにしか勉強しないとは言え、そこは私の机。その机上に見たことの無

い機械が置かれてたら誰だつて怒る。

だが、ぴゅう太は再び微笑み。

「あ、これですか？ これはMZ80B」そう悪びれる事無く答えた。

「そうじゃなくて」まったく調子狂うわ。

「ああ……これは、パーソナルコンピューターといって」

「え？」

「キーボード、モニターが一体となった画期的なマシンです。しかもデータ保存用にカセットテープが内蔵されているという優れものの」

自慢げに説明する彼。軽い頭痛がしてきたわ。天然？

「それくらい私にだって分かるわよ」

「志保さん、このマシンをご存じで？ 流石ですね」

「そうじゃなくて、私が言いたいのは」

「んゝ何が問題なのでしょう？」

「はあ、まあいいわ」

「変な志保さん」

「ったく。あんたが美少年じゃなかったら、真っ先に成仏させてやるのに。」

「で、その変なパソコン。何に使うわけ？」

「これですか？ これはあの世との通信に使うんですよ」  
「通信？」

「ええ、この世の言うところのインターネットでしょうか」

「はい？」クラッと来たわ。あの世のネット社会って一体。

「これでよし」

ぴゅう太は、準備の出来たパソコンの電源を入れた。微かなノイズと共にモニターが反応する。

グリーンモニターですかっ！



う  
う  
う  
う

## 第七話 お得な三姉妹？

その事実を知ったのは、私が学校から帰って間もなくだった。え？ 学生だったのかって？ こっちの方が衝撃的事実とか言わないように。いろいろとイメージしてくれてた人もいるかなって思うけど、これでも17歳。

で、衝撃的事実だけど。それは、帰宅して机の上に置いてあるパソコンを、ちよつと興味本位で触ってた時に判明した。

本体一体型なんてそう珍しくもないんだけど、グリーンモニターに力セットよ。触りたくなるってのが人情つてもんでしょ。ぴゅう太の話だとあの世に繋がってるって言ってたけど、回線も繋がってる節もないし……誰だって不思議に思うはず。

でもって、電源を投入。数分後に画面が表示された。ランキング画面と獲得ポイント。昨夜倒した『五郎』が載ってた。

「あつたあつた……どれどれ」

指を画面の端へ持つて行く。

「なんですつてっ！」

ありえない、あんなに頑張ったのにこのポイントはありえないわ。何なのよ九ポイントって。あの本じゃ二ポイントは貰えたはずなのに。

「どうかされましたか？」

「ひっ」

つたく毎度毎度、この美少年は……。

私が振り返るとそこにはぴゅう太が目を細くして微笑んでいた。

「ちよつとぴゅう太」

「はい？」

「何なの？ このポイントは」

「いやあ、見ちゃいましたか……へへへ」

へへへ……じゃないっての。今日はその笑顔には騙されないわよ。

あんなにやったのに、下手したら死んじゃうところだったのよ。なのに、なのにい。

「詐欺だわ」

「そんな事ないですよ。ポイントは厳正な審査の上、決められるんですから」

「じゃ、これは何？」

私は画面のポイントを指差して言った。納得いかないに決まっている。

「ああ、これはですね……半分は志保さんが原因なんですよ」

「はい？」私が原因で……「あつ」思わず右手を口に当てた。

「思いあたるでしょ？」

「まさかとは思うけど、もしかして戦った時に壊した……アレが原因って事？」

「ご名答」

「うつ」

私はその場でひざまずいた。認めたくないモノだ、若さ故の過ちと言うモノを……何て彼ならきつとそう言っただろう。

にしても、こんなに減点されるなんて思ってもなかった。修繕費が請求されなかっただけマシって考えた方がいいのかもしれないけど。やっぱり納得いかないわ。

「で、次の相手なんですが……」

「え？」ぴゅう太の声が頭上から聞こえた。私の気持ちは関係ないのね。

私はよろよろと身体を起こすと、またもにこやかに笑う彼の顔があった。一つため息をつき、緑の画面に視線を移した。

映し出されていた画面は、既に私が見た物とは違っていた。リスト形式なのは変わっていないかったが、例の本と同じような感じって言えば分かりやすいかな。

「下位の方は結構消されちゃったみたいだから、これなんかどうですか？」

消されたって、可愛い顔してサラツと言っわね。

「どれよ」ぴゅう太が指差した所に目をやった。「無理」

「えっ！　またですか？」

「アンタねえ、またって言うけどこれは無理でしょ」

「そんな事ないですって」

「そんな事あるって。だいたいいきなり三七位は反則でしょ」

「大丈夫ですって、相手は女性ですし」

「私が気にしてるのはそこじゃない。」

「そうじゃなくて、何なのよ。この三姉妹って」

「いいでしょう？　ポイントも三倍ですよ。お得です」

「お得じゃないって……」言いながら私はベッドへ向かい、腰を下ろし続けた。

「だいたい、下位の一人だって苦戦したのにそれが三倍よ。赤い彗星じゃあるまいし」

「赤い何ですって？」小首を傾げるぴゅう太。

「えっ？　知らないの？」

「ええ」

あんなに有名な人を知らないなんて意外だったわ、私でさえ知ってるのに。ぴゅう太の言動や態度からして、めっちゃ知っててもおかしくないと思ってたけど。

私は立ち上がり、左手を腰に、右手は人差し指を立て彼の勇姿を伝えようと口を開こうとした瞬間だった。何かを思い出したようにぴゅう太が放った言葉は。

「ああ、お父さんにもぶたれた事もないって人ですね」

「そいつはライバルだあ。そうじゃなくて、赤い彗星ってのは」

「いえ、それはいいです」

「え？」すきま風が、私の胸をすり抜けた瞬間だった。

ぴゅう太がキーを叩くとまた画面が変わった。ポイント三倍、お得な三姉妹のデータを見てみる事になったのだ。幽霊が操作出来る

パソコンを、私も触れるという不思議さ。ぴゅう太が椅子に座り、私は彼の右後方に立ち画面を覗き込んでいた。

「本当にやるわけ？」

「そのつもりですが」

いや、やるのは私なんですけど。苦笑してみたが、画面を凝視している彼にはきつと見えてはいないだろう。

「やるのはいいけど、今度はちゃんと戦力になるんでしょうね？」

「誰がですか？」ぴゅう太が振り返る。

「あんたよ」

「はい？」

他人事の笑顔に思考がフリーズ……不安過ぎるリアクションだわ。もしかしたら三対一も考えられる。それだけは絶対嫌、というより戦力的に無理でしょ。

「やっぱ降りる」その場を離れようとした私の腕をぴゅう太が掴む。

「大丈夫ですよ」

どっからそんな自信が来るんだよったく。

「兎に角、データはしっかり覚えてくださいね」

「はあ」強制出勤かいつ。

またもキーを軽快に叩くぴゅう太。小さな画面の中で次々にデータが移り変わっていった。結局、三姉妹とやる事になってしまった。

「場所は廃校」

ありがちね。

「時間は午前一時から三時」

よく言う丑三つ時ね。

「相手は三人。名前はユイ、ユマ、ユカ」  
何か聞いたことあるわね。

「三人は忍者の末裔で……」

「ちよつと待って」

「はい？」

「それ大丈夫なの？」

「何がですか？」

「いえ、一人はマッポの手先とか言わない？」

「違いますけど」

「ならいいわ」

「三人ともです」

「何ですって！」

勝てる気がしない。これなら、イレズミ三姉妹の方がマシって感じだわ。でも、サイコ何とかなんて私には無いし。

「ねえ、飛び道具とか使えないわけ？ 霊ガンとか」

「んゝ志保さんのレベルが足りませんねえ」

「はあ？」

レベルって何、何時からロープレになったんだよ。てか、私のレベルって今幾つよ。

## 第八話 廃校へ行こう！

夜中の学校っていうのは、どうにもこんなに不気味さが倍增するんだろっか。これで月が出てなかったらパスしてしまう勢いだわ。

私とぴゅう太は、三姉妹が出るといふ廃校に来ていた。雑草は生え放題、鉄の扉の校門は茶色に錆で、それを支える支柱は崩れ、扉としての機能を果たしてはいなかった。

「不気味よねえ」

「そうですか？ 僕はよく見かけてますよ」

幽霊に聞いた私が馬鹿だったわ。軽く頭を抱え、私は鉄の扉に手をかけた。その途端だった、僅かに軋む音がしたかと思うと大きな音と共に倒れてきた。

「きゃっ」

「大丈夫ですか？」

私はとっさに後ろへ飛んだというのに、ぴゅう太はその場を動いてもいない。しかも、にこやかに笑っていた。まったく、大事なポテチ落とすところだったじゃない。

「良いわね幽霊は」

「はい？」

小首を傾げる彼。嫌みの分らない男だ……。

私達は門をくぐり敷地内へと入った。

校舎は三階建てで、正面に生徒用玄関があり左右対象に教室が伸びていた。玄関の上には校章があったのだろうか、その跡が見受けられたが、今はもう無い。

正面玄関から向かって左側へ、私達は歩を進めた。廃校は付きものと言ふべきか、窓ガラスの殆どは割られその破片は直ぐ下に散乱していた。板で多少打ち付けてあったけど、それも意味をなしてはいないようだった。一言で言うなら、もう帰してって心境。

「今回は落ちつてますね」ぴゅう太が、周囲を見渡していた私に声

をかけてきた。

「え？ そうかな」

「ええ、そんな感じがしますよ」

まさか、この雰囲気にはビビッてたなんて言えない。いや、いつそ言ってしまったら今回のミッション、辞退させてくれたかも。

「と、取り敢えず正面に戻りましょう……って、あんた何してんのよ！」

「はい？」

ぴゅう太は、壁の中に入れた上半身を出し、不思議そうな顔で笑った。まったくこの幽霊は……やっぱ私を家に帰して。

「じゃあ、正面から入りましょうか」

何事も無かったかのようにさりとて言う。良い意味で緊張感が抜けるのはありがたいと思うけど、たまには私の意見も尊重してよ。

「最初に見たけど、ドア開かなかったわよ」

「大丈夫ですよ」

毎回毎回、どっからそんな自信が湧いて出る。大体、あの生徒玄関は入れないでしょ。板も打ち付けてあったし、しかも鍵が掛かってた。

「私は壁抜けなんて出来ないわよ」

「ぶち壊せばいいんですよ」

「はい？」

「だから、板もろとも壊すんです」

「誰が？」

「志保さんが」

「どうやって」

「必殺技で」

「レベル不足です」

「後ろ回し蹴りで十分ですよ」

「怪我したらどうすんのよ」

「得意でしょ？」



聞いちゃいない。そりゃ蹴り全般は得意だけどさあ、時と場合によるわよ。

「てか、アンタ中に入ってカギ開けてきてよ。そしたら隙間から何とかして入るからさ」

「そんな事僕に……出来ますね」

「でしょ」

苦笑いしながら、ぴゅう太の身体がドアの向こう側に消えた。つたく、何でも私にやらせようとする性格を何とかしてよ。

ほんの数秒待っていると、何の前触れもなくぴゅう太の上半身がにゅつと出てきた。

「！！」

「開きましたよ」

「脅かすんじゃないわよっ」

「すいません」そのままの格好で頭を下げるぴゅう太。

「つたく」

私は打ち付けられた板の隙間を、這うようにして潜り中に入った。生徒玄関を抜け、進入前に探索した教室側、つまり左へ折れた。

中は薄暗く冷たい空気が私にまとわりついてきた。右手に教室、左手に窓。何処にでもある学校の風景。月明かりが、板で閉ざされた窓の隙間から入って廊下を照らす。もう帰してくれなかな……私はぴゅう太をチラリと見てみたが「ん？」と言う仕草で軽く返された。

一歩歩くたびに、割れたガラスの破片が足の裏で軋む。ああ、嫌なのよねえこの感じ……転んだら絶対怪我しちゃうし。あと、この音も嫌い。

「取り敢えず、一年生の教室から行きましようか」

歩いてる風のぴゅう太が言ってきた。私としては面倒なので、

「アンタ、端の教室から最後まで一気に抜けて見てきなさいよ」

「えゝっ」明らかに不満な返答をするぴゅう太。何よその反応は……一つづつなんて、見てらんないってえの。

「それこそ、ぴゅっつてすり抜けて見たらいいのよ」

「途中で居たらどうするんですか！」

「誰が？」

「例の三姉妹ですよ」

「霊のね」

「ウマイッ」

「ほら、とつとと行く」

左手を払うように、私はぴゅう太に指示した。

「ちえ」不満顔はそのままに、渋々近くの教室へとぴゅう太が身体を潜り込ませて行った。

月明かりで照らされた廊下に、私は腰を下ろした。出来れば『誰もいません』で言葉に期待したいとこだわ。ボケっと待ってるのもアレだし、ポテチでも食べよう。今日はちゃんとコンソメ味、持ってきたし。

封を開け、薄暗い中で袋を広げてみる。

「んゝこのかほり。満足満足」

手を入れ一口。

「くはあ、やっぱポテチはこの味よねえ」

と、私が至福の時を過ごしてほんの数分。見慣れた顔がとんでもない勢いで近づいてくる。

「出たっっ！」

叫ぶぴゅう太。普通ならその台詞は私が言うべきだと、もう一口ポテチを食べながら思った。

「志保さん！ 出ました！」

更に叫びつつその顔が近づいてくる。血相までは流石に分からないけど、蒼白って感じなんだろうなあ。あはは……。

目の前まで来たぴゅう太に、

「で、誰が出たの？」

「えっと、誰と言うか……」

「歯切れが悪いわね。はっきり言いなさいよ」

「じゃあ言いますけど」

「けど」

「雑魚です」

「はい？」

「あちこちから流れ着いたというか……えへへ」

「それって、三姉妹とは関係ない？」

「まあ、そうなります」

「そう、関係ないなら別にいいわ」

「それが、そう言う訳にもいなくて」

「どう言う事よ」

ぴゅう太が指差した方、つまり跳んできた方を見ると。何やら怪しげなうねりと言うか、白い影が広がり始めていた。嫌な予感がするわ。

「まさかとは思っけど」

「お願いします」

ニコリと笑ってぴゅう太が言ったのけた。

冗談じゃないわよ。あんな数相手にしてたら、本命の前にバテちゃうわ。

「嫌」と、つつばねてみたけど。

「手遅れです」と、さらに。

「ったく、ちゃんとポイントになるんでしょうね!」

## 第九話 当てが外れる事もある

ぴゅう太が引き返してきた廊下の奥へ、私はダッシュした。雑魚ならすぐにケリ着けてやろうじゃない。

エネルギー補給も完璧だし。

右腕も唸るってもんよ。

だが、一気に引き返したくなる情景が、眼前に広がった。

暗闇の中から無数に伸びてくる手、手、て、テ……。

一体何本あんのよっ！ てか、何人いんのっ！

スピードはそのままに、私は左へステップしながら身体を低くした。

一本の腕が頭をかすめた。

「ひっ」危ないわねえ。

しかし、腕達は容赦なく私目掛けて飛んでくる。

つたく、満員電車に乗った車両が全員痴漢だったって心境だわ。

「後ろかつ」

両手を床に着いて、右足を天井に向けコマの様に回した。向かってきた三本の腕が中空で消える。私は勢いで背中を軸に二回転ほど回った。ダンスかっつの。

素早く立ち上がり、未だ腕だけの奴らを交わしながら先へ進む。

いい加減、身体も出してよね。

教室にして二つ半進んだ時だった。背中に衝撃が走った。

押されたというよりは、アメフトでタックルされた感じ。された

事無いけど、それほどの衝撃って事。

私の身体が空を舞ったのも束の間、すぐさま床に叩き付けられた。「ったあ」落ちた場所にガラスが無かったのは運がいい。身体を起

こし振り返る。

そこに居たのは大男だった。

強そう……それが彼の第一印象。

「えっと……初めまして」作り笑いを浮かべ挨拶してみた。

が、その大男は表情一つ変えずにパンチを繰り出して来た。

あは、やっぱいい。バックステップする私。今までいた場所に穴が開いた。

大男がゆっくりとしたモーションで上半身を起こしてゆく。

「ちやあんす」

私はすかさず右に飛び、横から足をへし折ろうと蹴りを繰り出した。

貰った！

だが、手応えがない。

奴が寸前で私の蹴りを交わしたのだ。しかも、ただ交わしただけでなく前方へ位置を変えていた。つまり、穴の向こう。今まで私が居た所に奴は居た。

やるじゃん大男。アンタは今から『本馬満』に決定。

「ぴゅう太っ居るっ？」

「はい何でしょうか」

あいつって奴は……声はすれども姿は見えずってか？ しかも声遠いし。

「アンタ、もう少し近くに來たらどうなのよ」

「遠慮させて頂きます」

即答ですか？ 幽霊なんだから少しくらい考慮されてもいいんじゃない？

まあいいわ。

「この本馬満なだけどさ」

「誰ですって？」

「ホンママンよっ」

「ああ、ここからでも見える大男の事ですかっ？」

「そう」

「また勝手に名前付けて」

「んな事はどうでもいいのよ」

「はあ」

「それより、こいつってポイントになるわけ？」

「わかりません」

またきっぱりと言うわね。

「あの、お嬢さん？」頭上から声がしたが、

「っさいわね。今忙しいの、後にして」払う様に私は言った。

「あのう……」再び頭上。

「今すぐ調べてっ！」私はぴゅう太に叫ぶと「はい」とだけ返事が返ってきた。

「で、さっきから何よ」と頭上に目をやった。

そこには、本馬満が私を見下ろしていた。

「えっと……は、はろう、あはは」今度は右手を軽く上げて小首を傾げてみた。

が、右膝が空気を切り裂いて勢いよく向かってきた。  
やっぱそうなるわけえ。

くそっ、今度は間に合わない。右手に左手を添えるように、私はその飛んでくる膝を鳩尾付近で受け止めた。

とは言え、体格差は明白。両足が軽く浮くと、一メートル程飛ばされた。

右膝を付き、上半身を起こしながら、

「か弱い女の子に何て事すんよっ」

「か弱い女は、俺の蹴りを受け止めはしないが」

「え？」

こいつ、言葉が通じる。なら説得出来るかも？

なら、答えは簡単。

「あの、大人しく成仏してくれない？」

「断る」

いやあんぐこっちも即答。

「そこを何とか……ね？」目一杯可愛く、両手を合わせてお願いのポーズ。が、

「断る」

「何でよ。あなたも成仏したいでしょ？」

「俺は、俺より強い奴に負けるまで成仏する事は無い」

「あそう、じゃ私には無理ね。そゆ事で今までの話は無かった事に」  
踵を返し、背を向けようとした瞬間肩を掴まれた。

「そうはいかない」

す、素早い。

「何でかな……かな？」肩の手を振り払い言った。

「ここで会ったのも何かの縁だ。俺と戦え」

無茶言っなこいつは。第一、ここで私が戦って何の得が有るって  
言うのよ。

断固拒否よ、拒否。

「嫌よ」

「俺を倒すとボーナスポイントが付くが」

「うっ」

ボーナスポイント……何て魅力的な言葉なんでしょう。

ちまちまとポイントを貯めるより、効果覲面。

まさにビッグチャンス！

どうしよう、気持ちが揺らぐわ。

とは言え……私は本馬満をチラ見した。やっぱデカイ、バカが付  
くほどに。

でも、ハンデ戦ならいけるかも？

「ねえ、物は相談なんだけどさ」

「何だ」

「ハンデくれるなら考えてもいいわ」

「ハンデ？」

「そう、どう考えたってこの体格差は反則でしょ？」

本馬満の目の前に立ち、背伸びしながら身長差をアピール。

「うっむ、確かに」

お、いい反応。もう一押し？

「例えば、あなたがK1ルールで私が総合とか」

「ん」腕組みをして深く考える本馬満。

よしよし、これは行けそうな気がする。相手が打撃系なら捕まる心配無いし。何より寝技が無いのがいいわ。

「どう？」

「いいだろう」

っしや。

廊下は狭いし、天井も低い。体格が大きければ不利な要素は結構ある。ボーナスポイントは頂いたようなもんよ。

何て思いを巡らせていた所に、

「ではこっちで、正々堂々と勝負だ」

「はい？」

本馬満は、月明かりが微かに差し込む廊下の壁に向かって右腕を大きく振り上げ、思い切り下ろした。足下が強く揺れると、壁には大きな穴が開いていた。

まさかと思うけど……。

「ここは狭い。外で心おきなく勝負をしようではないか」

「ま、まじいっし！」

当てが外れたわ……どうしよう。



## 第十話 こうなったら勝ちに行くしかない

風穴を潜って外に出ると、そこそこ広い場所になった。

よりによって何で広いかな。月明かりは一層明るいし……忌々しいったらない。

私は周囲を見回した。やっぱり広い……グラウンドかって一瞬思ったが違うようで、校門から生徒玄関までの区間を広く取っているようだった。

少し離れた所に、私が進入した生徒玄関が見えた。足下を見ると、本馬満の影が私の影と重なっていた。幽霊のくせに影があるなんてナンセンスだわ。

外で見ると、改めて彼のデカさが際だっていた。対峙してるだけでも圧倒さそうだってえのに、これから一戦交えようってんだから……。

「で、勝負の勝敗はどうやってつける？」

左手を腰に当て余裕の表情を見せつつ、一応聞いてみる。ホントは余裕なんてない。

「完全決着」

スパッと来たわね。

そうだとは思ってたけど。ちょっとは考えるとか無いわけ？

「時間制限は？」

「無制限一本勝負」

いよいよピンチに拍車が掛かったって感じだわ。

こらこら、親指を立てんじやないわよ。しかも何よその笑みは……勝つ気満々てわけ？ ちょっとむかつくわ。

「マジ？」

「ただし、夜明け前までに決着が付かない時はボーナスポイント無しだ」

「はい？」

ちよい待て、今さっき無制限とか言っでなかった？ しかも、疲れ果てた挙げ句にポイントも貰えないなんて事になったら冗談じゃない。どうしよう、ここで止めるって手もあるけど……すんなり受け入れてくれるかしら。

「棄権してもよろしくて？」

「無効だ」

「ちっ」

言葉使いを変えてもだめだったか。即答のうえに無効って何よ。

腕時計をチラリとのぞき見た。勝負するしかないとなれば、このまま考えてても仕方ない。私は覚悟を決めた。

深呼吸をして、二歩下がった。その動作に本馬満がニヤリと笑う。

「何時でもいいぞ」

右手人差し指で挑発してくる。

その余裕、絶対に後悔させてあげる。

まずは先手必勝。私は正面から突っ込んだ。それが意外だったのか、彼は驚きの表情を浮かべた。

が、遅いつ。私は直前で左にステップし彼の右側へ。丁度右斜め後方に位置した瞬間、左足を軸に彼の右膝目掛けてローキックを御見舞いした。

「痛っ！！」

強烈な、ほんと激痛とはこのこの事よってばかりの痛みが走った。その場に崩れ落ちるわけにはいかない。何たって、大きな手のひらが左側から、私目掛けて迫ってるんだから。

私は左足で地面を蹴って後方へ交わした。頭上を掠めるように手のひらが通り抜けた。その後その風圧が私へ届く……なんて威力、あんなのまともに食らえない。

少し痛む足を引きずり、私は立ち上がった。そして彼の方へ視線を向けた。

ちっ、ニヤケてるし……余裕って事？

「どうした、その程度か？」

「まさか、今のはほんの挨拶代わりよ」

「ふふふふ」

嫌な笑い。ああは言ってみただけど、さて次はどうしよう。膝から崩せば何とかなると思ったけど、そう簡単にはいきそうにないわ。大体にしてリーチが違いすぎる。

ああ、飛び道具が使えたらなあ。

なんて、夢みたいな事考えたって仕方がない。今はこの状況を打破しなくちゃ。

「来ないなら、こっちから行くぞ」

「へ？」

ちよつと待つてえ。こっちも都合つてもんがあるわよ。

と、思いを巡らせる間もなく本馬満が巨漢を前後に二度揺らす。

そして私を見下ろすように上体を後ろに反らしたかと思うと、刹那その反動を使うかの如く前方へ跳ねた。一枚の大きな鉄板が迫り来るような、そんな感覚で私へと一気に距離を縮める。

早っ！

ほぼ直立のまま跳んでくるもんだから、迫るのは頭と言うか顔だった。

どうする？

思考を巡らせる事コンマ数秒。私はその場にしゃがみ、迫り来る顔を一瞬睨みつつ上方へ飛び上がった。勿論タイミングを見計らって、と言いたい所だったけど、殆ど偶然。間一髪って言った方が正解かもしれない。そんなタイミングで私は彼の頭のとっぺんに手を着いた。丁度跳び箱を跳ぶ感じで。

綺麗なフォーム。端から見たらきつとそう見えたとはいえない。私はそんな事も思いながら、更に高く上に跳んだ。前方へ押し出す様に体重を移動させ、身体を伸ばし捻る。決まった、ムーンサルト。着地も決めて、振り返った。同時だったのだろうか、彼もこちらを見ていた。

「まさか飛び越えるとはな」

「思いもよらなかった?」

「そうだな……だが」

「逃げてばかりじゃ勝てない、と?」

「まさしく」

「そうね」

分かっているわよそんな事。あの巨体であのスピード。反則だわ。最近のゾンビは、全速で走るような時代だって思っただけ、どんなドーピングしてんのよったく。

時計に目をやった。もたついてはいられない、駄目でも何でも、まずは奴を崩さないと。膝は駄目だった。次はボディか……行くしかないわ。

彼に向かって私はダッシュした。右拳に靈力を溜めた。

「だあああつ!」懐に飛び込む。

左手が振り下ろされた。更に深く踏み込んでそれを交わす。間髪入れず右手が迫る。一步引いてそれも交わした。

「食らえっ」

再び踏み込んで右拳を鳩尾へ叩き込んだ。

「ぐふっ」本馬満の身体がくの字に折れた。

よし、手応えありっ。続けて左も、と力を込めた。だが、下方から緊張が走った。

「っな、膝!」

急遽出しかけていた左手を、彼の右膝に目標を変えそこに手を着いた。同時に彼の腹を右足で蹴り、後ろへ跳ねた。したたか地面に背中を打ち、転ぶように交わした、私が上半身を起こすと、奴がまたまた嫌みな笑みを浮かべていた。

「よく交わしたな」

「反射神経は良い方なの」直ぐさま立ち上がり息を整えた。

「今のは中々良かったぞ」

まさか効いてない? そんなはずない。あの時見せた苦悶の顔は本物だった。それじゃ、回復が驚異的って事? だとしたら単発で

は無理だ。コンボ攻撃。それも、回復が追いつかない位の攻撃を叩き込まないと勝てない。

どうする？ やっぱここは更なるエネルギー補給が必要ね。

「ぴゅう太ゝいる？」

「何でしょう志保さん」

ふっと私の右隣に姿を現す。

「エネルギー補給よ」

「コレですね」

「そう」

私は新しいポテチを受け取ると、それを開封した。

## 第十一話 風穴三姉妹、見参！

開封すると、お気に入りの香りが鼻孔をくすぐった。この色といい、形といい、やっぱりポテチはコンソメよねえ。私は彼の動きを警戒しつつ、ポテチを目一杯口へと放り込んだ。口の中一杯に広がる何時もの味、力が底から湧き上がってくる。

チラリと彼を見た。

相変わらずのデカさが更に際立っている。エネルギー補給したとは言え、本当に勝てるのか……不安が頭の中を駆け巡った。

兎に角、ここをどうにかしないと先は無いつてわけだし。

「美味そうだな、それで準備はできたか？」

本馬満がゆつくりとした口調で言った。その言葉の裏には余裕さえ感じられた。

何さ、お菓子食べた位で状況は変わらないって思ってるんでしょ。絶対後悔させてあげるから。

パリッ、私はちよつと大きめの一枚を口に入れると、残りをぴゅう太に渡した。

「湿気らないようにちゃんと管理するのよ」

「分かりました」ぴゅう太は、ふつと姿を現しそしてすぐさま消えた。ただ、袋は消える事が無いので消える意味があるのか疑問に思っただが……。

でも、知っててやってんなら天才だね。

「お待たせ」私は軽くウインクしてみた。

「じゃ、続きを始めようか」本馬が指を鳴らした。

「望むところよ」

私も軽くファイティングポーズをとって見せた。にしても、ホントどうしようかしら……。相当強力なコンボ技じゃないと倒す事な

なんて不可能だわ。

飛び道具はレベル不足だって言ってたけど、結局レベルも曖昧だし。

もしかしたら、頑張れば出るかもしれない。

流石に、指先から出すのは無理かもしれないけど。

あとは気合。

「それじゃ……行くわよっ！」

私は深呼吸し、一気に間合いを詰め、目前で地面を思い切り蹴って高くジャンプした。

狙いは首。上半身を捻り、その反動で足を水平に回した。

後ろ回し蹴りで踵をヒットさせるつもりだった。

が、やっぱり敵も素早い……見事に防御。

ちっ、思わず舌打ち。

体制上、後ろ向きで着地する形になった。瞬間、背後に何か迫るモノを感じた。

ヤバし。左ローキックが私目掛けて飛んできていたのだ。

咄嗟に右に転がり間一髪で交わした。

「フフ、よくぞ交わしたな」

本馬は繰り出した左足をゆっくり戻し、不適に笑った。何よ何よその笑みは、絶対馬鹿にしてるって感じだわ。

嫌な奴。

上が駄目なら。

「今度は……」私はさっきと同じように間合いを詰めた。そして目前で又も飛ぶ様に見せて、実は。

「かの破壊王が得意だった。水面蹴り！」

一気に体制を低くしクルリ駒の如く回転した。そして、本馬の足

元をすくう様に下から思い切り蹴り上げる。

「何っ！」グラリ巨体が揺れた。と言うより、私目掛けて倒れこんできた。

チャンス！ 私は手を地面に着き、丁度逆立ちするような格好でロケットの様に本馬の顔面目掛けて飛び出した。

「ぐおっ」顎にヒット。本馬の上半身は上方に跳ね上がった。どんな屈強な男でも顎は弱いと聞いたけど……アレ、違ったっけ？

まあいいわ、取り敢えずかなり効いてるみたいだし。

巨体が地面に崩れ落ちた。

さて、ここから一気に畳み掛けるわよ。

と、勢いに乗ろうとした刹那。

「ぬおおおおっ！」

「え！？」

地鳴りのような咆哮が私の耳を貫いた。全身がビリビリ響くような感覚にとらわれる。

何よ、まだまだ動けるって訳？

「今のは効いたぞ」言いながらよろよろと立ち上がってくる。

何つつタフさよ。

でも、今ならイける可能性が出てきた感じ、迷ってる暇は無い。

行くわよ 完全に立ち上がる前に仕留める。

私はダッシュし、腹部目掛けてジャンピングニーを食らわせた。

着地と同時に右フックを力一杯入れる。そして、それをキャンセルしたつもりで……。

「竜巻旋風脚っ（ホントはただの回し蹴り）」

「ぐおっ」

さあ、トドメの一撃！ 今の私ならきつと出来る、伊達にDB全巻読んでないんだから。私は三步下がり、霊力を両手に集めた。

「カ〜メ〜は〜」

「な、何を」

「マンね〜んっ堂っ！」



突き出した両掌から放たれた霊気は、固まりとなって本馬の鳩尾を直撃した。

巨体はくの字に折れ、再び前のめりにゆっくり倒れ込んできた。廃業した風呂屋の煙突が倒れるが如く……そうだ、帰ったらシャワーじゃなくて、お風呂入りたいわ。

倒れた本間に恐る恐る私は近寄った。流石に、もう立ち上がってこれないでしょ。

一歩下がった所で立ち止まり、彼を見下げた。俯せに倒れている彼の首が僅かに持ち上がった。思わず後ずさった……が、しかし。

「ま、まさか飛び道具とは……」

「恐れ入ったかしら？」

「ふっ、見事……だった」

「ありがとう」

そう言つと、彼の巨体は闇に消えていった。

はあ、やっとボースステージクリアね。私はその場にペタリと座り込んで、空を仰いだ。途切れ途切れに流れる雲が、月を隠そうとしているのが見えた。

「さあて」一息吐き今度は地面を見つめた。すると、その地面からぴゅう太がぬつと姿を現した。普通なら心臓が飛び出す位に驚く所なんだろうけど、放心してるのか普通に受け入れている自分がそこにはいた。

「いよいよ三姉妹と対決ですね」

「疲れたから帰るわ」私は立ち上がり、そそくさと歩き出す。その動きに合わせて、ぴゅう太が私の正面をフワフワと浮遊しながら着いてきた。

「えっ！ それ、本気と書いてマジですかっ！」

「これから三人も相手に出来ないわよ」

「そんな事言わずに、何の為にここまで来たんですか」

心底困った顔をするぴゅう太。あら、ちょっと可愛いかも。でもねえ、やっぱ厳しいわよ。

「ほら、また出直して来るって手もあるじゃない」

「それじゃ、困ります」

「そうは言っけどさあ……」もう一度空を仰ぎ考えてみた。既にやり切った感が満載なのは拭えない。雲が月を隠し、闇が深くなってきたように感じた。

「でもう」

とか、やり取りしてる時だった。二人の間を風が通り抜けた感覚に襲われた。歩を止め、その抜けた先に視線を移す　丁度真後ろ。何時まで待たせるつもりなのかしら」

巨体の消えた少し先に、三つの人影があつた。その誰かが発した言葉だと思うが、何処か感に障る口調。

「まあまあ、押さえてお姉ちゃん」

向かつて左側の影が、真ん中の影の肩を叩く仕草が見て取れた。

て事は、真ん中がボス？　ゲシッ、直ぐさまローキックが左側の影に飛んだ。影が崩れ落ちる……うわぁ痛そう。

「何度言ったら分かるのユイ？　ユカお姉様とお呼びと言ってるでしょ」

「ごめんなさい、ユカお姉様」

ユイにユカ？　……まさかとは思っけど、会わずに帰ろうと考えてた例の三姉妹？

「それよりも、その貴女！」

「え？　私？」唐突に呼ばれて、びっくりの私。少しは心の準備もさせてよね。

「貴女以外に誰がいらっしやるのかしら？」

にしても、その言葉使いやメテッ、鳥肌が立ってくる。姿が見えない分余計に腹立たしい。それにあのシルエットからして、きっと私の事を指差してるんだらうけど……よく見えない。

ま、兎に角今は　。

「じゃ、そゆ事で」私は右手で手を振り、何事も無かった様に再び歩き出した。

「ちよつと待てゝい！」

今度はまた違う声が響いた。

三人目か。

「何よお」振り返りもせず歩だけ止めた。

「おのれは、ユカお姉様を無視する気かつ！」

うげつ、怖つ。しかし私は歩を進めた。関わりたくない一心で、それはもう何事も無かつたように平静を装つて。

「待たんかいつボケツ！」

何か叫んでる。

が、無視無視。

「志保さん、呼ばれてますけど」ぴゅう太が私と後ろを交互に見て、おろおろしている。

「黙つて着いてくるのよ」

「でも、折角向こうから出てきてくれたんですよ」

「いいからっ」

「待て言つとるやろっ！」

完全無視。

「……お願いだから待つてよお」

いきなり半泣き？ それともフェイク？ ともかく、負けたわ。

「はぁ」溜息を一つ吐き、私は仕方なく止まって振り返った。

「やつと止まつたな」

何故上から目線　まあいいわ。

月を覆っていた雲が切れ始め、徐々に辺りに光が差し始めていた。

「ささ、ユカお姉様。続きを」

「私達を目の前にして、無視するとはいい度胸ですわね」

「別にそんなつもりは……（あつたけど）」

「ふん、ますます不愉快ですわね」

「で、何？」

「な、何って……貴女、何時まで私達三姉妹を待たせるおつもりでしたの？　と聞いているのよ」

ああ、やっぱり本命の三姉妹だったか。出来るなら会いたくなかったわ。ましてや、直々に登場しちゃうなんて。ツイているのか、いないのか……微妙な感じ。

「別に待たせるつもりは無かったわ。ただちょっとしたトラブルが起きちゃってね」

「トラブルですって？」

「そうトラブル」

「兎に角、帰りたければ私達を倒してからにしてほしいですわね」  
出来れば関わりたくないから、こうして帰ろうと思ってたわけなんですけど。

でも私の苦笑を余所に、三人のテンションが上がってきてるよう  
で。

「私の名は、風穴ユカ……人呼んで折り紙のユカ！」

月光の元にその姿を現した彼女は、ポニーテールにちょっと下膨れな顔。

折り紙って、それで何するつもりなのよ。

「ぴゅう太？」私はその場に体育座りして、ぴゅう太を呼んだ。

「何でしょう？」

「さっきのポテチ残ってるわよね？」

「あります……けど」

小首を傾げ、丁寧に開け口を塞いでいる袋を見せて言った。

「こっちにくれる？」

「はい？」私はぴゅう太から袋を受け取ると、再び手を入れて不揃いのチップを口へと運んだ。三姉妹の名乗りは続いていた。

「同じく、アタイは風穴ユマ……リリカルユマ！」

ロングヘアーで、凛々しい顔立ち。

でも、ホラ、間違ってるよソレ。手に持ってるのはどう見ても編み棒だし。

「最後に、私はユイ、風穴ユイ……えっと、ハイパーヨーヨーのユイ！」

ショートカットに可愛い顔。ちょっと天然な感じがするわね。  
にしても、うわぁ綺麗、光ってる。

で、みんな揃いのセーラー服に……スカート丈長っ。

「風穴三姉妹、見参っ！」

ハイハイ、ポーズまで決めてくれちゃって。

「ちょっと貴女！」

「あ、終わった？」丁度袋の中身も無くなる寸前だった。

「何処までもバカにして　でもその余裕、何処まで持つかしらね」  
「え？」

途端に三人が三方に散った。

ヤバッ、速い！　私は急いで立ち上がった。

正面にユカ　しかし、左から衝撃が来た。  
手に持ったポテチが吹っ飛んだ。

視線を移す。

ユマだ。彼女が私の腕に蹴りを入れていた。

「くっ」油断した。だが、続いて背中に衝撃。

正面はユカだ、だとすると　ユイ？　息が詰まる。

前のめりになった所に、ユカの唇の端が僅かに上がる。

「ぐはっ」腹部に強烈なパンチを食らった。

そして、三人は直ぐさま私から離れた。

ヒット&アウェイって訳ね。

腹部を押さえ、三人の姿を探した。

頭に来るくらい素早いわね。もう元の場所に戻ってるし。

「大丈夫ですか？　志保さん」

ぴゅう太がスツと現れ、私の側で心配そうな顔を浮かべた。

「駄目そう、流石に忍者の末裔」

「頑張ってください」

無責任な応援ありがと。

にしても、三対一はかなり不利だわ。

「どうでした？　私達の連携は？」

ユカが腰に右手を当て、自慢げに言い放つ。

「卑怯だわっ！」

痛さを堪え、私はユカに向かって指差し叫んだ。

「何ですって」

「か、か弱い女の子に三人掛かりで来るなんて、卑怯の何者でもないと云ってるのよ」

「なら、一対一で……」

「ユカお姉様っ」

「何ですのユマ」

「奴の口車に乗っちゃ駄目だ」

「!？」

「奴はアタイらをバラバラにして、タイマン勝負に持ち込もうとしてるんだよ」

「何んですって!」

ちっ、あいつが一番バカそうだと思っていたのに。

「アンタの魂胆は、ビシッとバビッとお見通しだよっ」

「仕方ない か」

私は気合いを入れ直し、拳を握った。

見上げた空は、未だ月が高い所に浮かんでいた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4775f/>

---

ばてちはコンソメ・右パンチ！

2010年10月10日14時09分発行